

「FURIKA」Web 授業アンケート調査による授業の評価と改善について
スポーツ科学部の実技科目における授業内容の振り返り促進のためのアンケート結果の活用

田場 昭一郎* 道下 竜馬* 森 誠護**

要約

授業評価を目的としたアンケート調査は、各々の大学で様々な方法で実施されている。授業は、お互いの「教えること (Teaching)」と「学ぶこと (Learning)」の相互関係から、授業後の満足度 (Satisfaction) に双方の評価が合致することが重要である。従って、このようなアンケートは指導教員の理念を保ちながら学生の必要性に応じて授業が改善できるような内容が望ましい。2018 年度から、FU ポータルでシラバスの到達目標と併せた「FURIKA」Web 授業アンケート調査が開始された。そこで、本稿では「FURIKA」Web 授業アンケート調査における初年度の結果をもとに、実技の必修科目における学生の実態を把握するとともに、授業内容改善のための課題について報告する。初年度に水泳 I (必修科目) を履修した学生 369 名 (回答率 91.5%) を対象に授業の振り返り分析を実施した結果、学生の主観的な自己評価が明確化され、特に「FURIKA」に掲載された散布図 (到達図: T 図) の到達目標への到達度と成績の関係について、平泳ぎの泳動作の理解と 3 分間泳の項目に高値 (相関係数: 0.60) が示された。「FURIKA」は、学生の自己評価のみならず、到達目標を達成するために改善すべき指導上の課題も見直すことができる。授業の到達目標は、努力を要する基準を設定することで予習・復習の意欲も高まり、授業に対して真摯に取り組む姿勢が育まれるものとする。つまり実技科目の場合は、運動形態の理解 (理論) と技術の習得 (実践) の双方が伴った到達目標が設定されるため、指導方法も常に評価・改善していかなければならない。しかしながら、クラス・学科・男女別の回答分布のバラツキと学生のメタ認知に関しては改めて検討する必要性を感じた。これらのことから、学生が苦手意識を持って受講する実技の必修科目においては、授業改善の指針を得るための手段として「FURIKA」が有効に活用できるものとする。

1. はじめに

スポーツ科学部では、授業アンケートの結果に基づいた教育改善への取り組みを目的として、本学部の専門科目および全学の共通教育科目において「講義」と「実技・演習」の双方でマークシートを活用した授業アンケート調査をこれまで実施してきた。このアンケートの調査結果は報告書として統括され、教職員で情報を共有することによって「授業開

* 福岡大学スポーツ科学部准教授

** 九州共立大学スポーツ学部准教授 (福岡大学非常勤講師)

講→アンケート実施→結果のフィードバック→授業改善報告書の提出→授業改善に関する情報共有→授業内容の改善→授業開講」のPDCAサイクルを確立してきた。

2018年度から、教職員がシラバスに明記した授業の到達目標と併用して、福岡大学のFUポータルから学生がアンケートに回答する「FURIKA」Web 授業アンケート調査が全学的に導入された。この調査によって、学生の学習意欲と到達度が客観的に把握できるようになった。また、学生がどの到達目標に理解を示し、どのくらいの知識・能力・技能が身についたか、また教職員が自身の授業を詳細に振り返ることによって、次年度の授業をより充実させるべく、改善しなければならない事柄を明確に具現化できるようになった。この「FURIKA」Web 授業アンケート調査の取り組みは、学生のパフォーマンスに焦点を当てた設問項目によって構成されていることから、学生の授業に対する理解度、今後の教職員の授業改善のあり方について、授業内容を客観的に分析できるデータ収集法である。

そこで本報告は、スポーツ科学部の必修科目である水泳Ⅰの「FURIKA」Web 授業アンケート調査における初年度の結果をもとに、実技の必修科目における学生の実態を把握するとともに、授業内容改善のための課題について報告する。

2. 水泳Ⅰにおける種目の特殊性および授業概要について

水泳Ⅰは、中学校および高等学校の教職課程を履修している学生はもちろんのこと、スポーツ科学部生全員が履修しなければならない必修科目である。昨今、自身の専門競技種目には長けているものの、その他種目の実技能力にやや問題を抱えるスポーツ科学部生が増加傾向にあり、水泳Ⅰのような必修科目に対する学生の学習意欲について問題を抱える一途にある。例えば、上位学年で履修する選択科目や選択必修科目の場合、当然のことながら、学生が興味・関心を持って積極的に履修し、場合によっては資格取得のために高度な技術を身につけるべく、より専門性の高い授業内容が展開されるであろう。そして、学生が積極的に履修した授業のアンケート結果も、学生の前向きな回答やコメントが寄せられるものと推測される。しかし、学生が興味・関心を持つかどうか疑問視されながらも、必修科目として開講されている授業に関しては、前向きな学習意欲が持てずに受講する学生も多く存在する。このような学生は、苦手意識を強く抱いた状態で、ただ卒業することを目的として授業を受講し、シラバスに提示された到達目標を已む無く達成しなければならない状況に陥ることが考えられる。

水泳Ⅰは、残念ながら多くの学生が苦手意識を強く持つ科目として捉えている傾向にある。水泳は陸上の運動とは異なる環境で、水という媒体によって身体をコントロールする運動で、スポーツ科学部の実技種目の中でも特に専門性と特殊性の高い科目である。しかし、過去のトラウマによって水泳に興味・関心が持てない学生、小中高の特に義務教育課程において水に関わる教育の学習経験が乏しい学生、幼少期に溺れてしまった経験によって、水に恐怖心を抱いている学生らが多く存在する。このような状況で、2018年度から実

施された「FURIKA」Web 授業アンケート調査の結果を現場教育に有効的に活用したい。水泳Ⅰでは、アンケート調査の初年度となる 2018 年度から学生の実態が詳細に把握できるように、より多くの設問項目（到達目標）を設けた。実技科目の場合は、その運動形態を理解した上で説明できること、自らが実践すること、最終的に指導できることが到達目標となる。つまり、理解度に加えて実践のための技術、泳力、指導力を身につけなければならない。到達目標（12 項目）および授業に対する積極性と理解度（2 項目）、そして成績評価基準とその評価方法は以下の通りである。

基本技能

- ① ボビング動作を理解し指導できる
- ② 浮遊技術および潜水技術を理解し指導できる
- ③ けのび（流線型：ストリームライン）の重要性について理解し指導できる
- ④ スカーリング技術について理解し指導できる

クロールの技能

- ⑤ クロールのキック動作について理解し指導できる
- ⑥ クロールのプル動作について理解し指導できる
- ⑦ クロールのスイム動作について理解し 50m を完泳できる

平泳ぎの技能

- ⑧ 平泳ぎのキック動作について理解し指導できる
- ⑨ 平泳ぎのプル動作について理解し指導できる
- ⑩ 平泳ぎのスイム動作について理解し 3 分間完泳できる

応用技能

- ⑪ 水中エクササイズの重要性について理解し説明できる
- ⑫ 競泳 4 種目について理解し説明できる

全科目共通

- ⑬ この授業に関して主体的・積極的に取り組むことができたか？
- ⑭ この授業の内容に関してどの程度理解できたか？

成績評価基準および評価方法

クロール 50m 泳力テスト＝記録毎に 8 段階で評価（男子 50 秒以内）（女子 55 秒以内）
平泳ぎ 3 分間泳力テスト＝記録毎に 8 段階で評価（男子 125m 以上）（女子 115m 以上）

3. 各項目に関するアンケート結果について

水泳Ⅰはスポーツ科学部の2年次生を対象とした必修科目で、火曜日2・3限（スポーツ科学科男子：以下GS男）、金曜日1限（スポーツ科学科女子：以下GS女）2限（健康運動科学科男子：以下GH男）3限（健康運動科学科女子：以下GH女）の計5コマで開講し、2018年度に履修した学生の総人数は369名（再履修者を含む）、その中で2018年度のアンケートに回答した学生の総数は336名（回答率91.5%）であった（表1）。

表1

水泳Ⅰの授業における「FURIKA」Web 授業アンケート回答者の属性

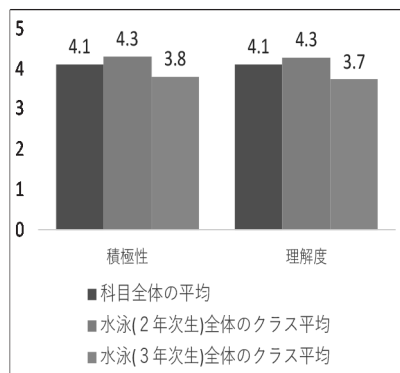
授業日	履修者数	アンケート回答数と割合		"学んだこと"の回答数と割合	
火曜2限GS男	103人	89人	86.4%	74人	83.1%
火曜3限GS男	91人	85人	93.4%	66人	77.6%
金曜2限GH男	58人	52人	89.7%	36人	69.2%
金曜1限GS女	62人	58人	93.5%	44人	75.9%
金曜3限GH女	55人	52人	94.5%	35人	67.3%
合計	369人	336人	91.5%	255人	74.6%

水泳Ⅰの集計結果に示された回答分布（表2）について、スポーツ科学部の科目全体の授業に対する積極度（4.1）と理解度（4.1）に対して、水泳Ⅰの2年次生履修者は、積極度（4.3）と理解度（4.3）の高値を示した。これは、水泳Ⅰに積極的に取り組み、かつ非常に理解出来ているとの評価として窺えるが、学生が「水泳Ⅰの授業の難易度をそれほど高くないものとの認識している」または「他の科目に比べて積極度と理解度に関して過剰に自己評価している」との解釈にも受け取れる。3年次生（再履修）については、積極度（3.8）と理解度（3.7）が極めて低く、さらに男子よりも女子のほうが高い傾向を示し、男女ともGH学生のほうが積極度と理解度の双方において高い傾向にあった。

表2

水泳Ⅰの授業アンケートにおいて「集計結果」で表示されている回答分布

	2年生		3年生	
	積極性	理解度	積極性	理解度
火曜2限GS男	4.2	4.2	3.6	3.3
火曜3限GS男	4.2	4.2	3.0	3.6
金曜2限GH男	4.3	4.3	4.1	4.0
金曜1限GS女	4.4	4.4	履修なし	
金曜3限GH女	4.4	4.2	4.5	4.0
水泳の全クラス平均	4.3	4.3	3.8	3.7
科目全体の平均	4.1	4.1	なし	なし



3.1 基本技能について

基本技能（①②③④）に対するアンケートの回答結果を表 3～表 6 に示した。ボビング動作（71.4%）や浮遊技術および潜水技術（73.8%）の「十分にできた」「ややできた」の回答分布から、学生の主観的な自己評価が非常に高いことが窺える。これらの技能は、水中運動において呼吸の確保を理解するための基本的な技能であり、学生の理解率を高めるための徹底した指導が必要である。さらに、これらの技能は、幼少期（小学校 1・2 学年）の水泳の授業において、水に慣れる遊び（だるま浮き・伏し浮き・股くぐり・石拾いなど）の中で身につけておくべき技能である（参考資料）。したがって、中学校および高等学校の教職課程を履修する学生は、水中での呼吸法や身体の浮沈み方法を十分に理解し、自己保全能力について指導できる能力を身につけなければならない。また、けのび（ストリームライン）動作の「十分にできた」「ややできた」の回答率（84.3%）は非常に高い自己評価を示した。この技能についても、本来は幼少期（小学校 3・4 学年）の水泳の授業で身につけるべき技能である。また競泳の非抵抗技術としての基本動作であり、この授業の評価基準（ノルマ）を達成するために重要な要素であることから、学生が前向きに理解する姿勢が窺えた。さらに、基本技能の中で「全くできなかった」「あまりできなかった」の回答率が 10%以上を示したのはスカーリング技術で、「どちらともいえない」の回答率も 30%以上であった。この技術は水感（水の感覚）を高めるための高度な技能であり、特に水泳 II で取り扱う技能でもあるため、次年度の水泳 I の到達目標として勘案すべき項目である。

表 3

① ボビング動作の習得

	十分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜 2 限GS男(%)	33.7	34.8	22.5	6.7	2.3
火曜 3 限GS男(%)	32.9	35.3	20.0	4.7	7.1
金曜 2 限GH男(%)	26.9	50.0	17.3	3.9	1.9
金曜 1 限GS女(%)	25.9	44.8	20.7	3.5	5.2
金曜 3 限GH女(%)	28.4	44.2	19.2	5.8	1.9
全クラスの平均値(%)	29.6	41.8	19.9	4.9	3.7
	71.4			8.6	

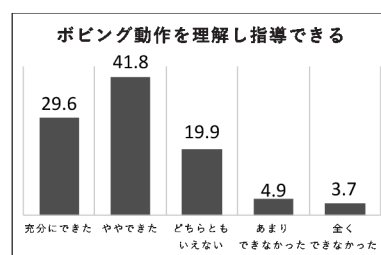


表 4

② 浮遊技術および潜水技術の習得

	十分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜 2 限GS男(%)	31.5	44.9	16.9	4.5	2.3
火曜 3 限GS男(%)	32.9	38.8	18.8	4.7	4.7
金曜 2 限GH男(%)	32.7	48.1	15.4	1.9	1.9
金曜 1 限GS女(%)	22.4	46.6	25.9	1.7	3.5
金曜 3 限GH女(%)	23.1	48.1	15.4	13.5	0.0
全クラスの平均値(%)	28.5	45.3	18.5	5.3	2.5
	73.8			7.7	

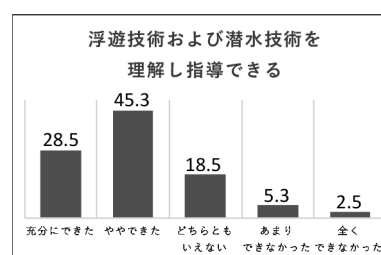


表 5

③ けのび動作の習得

	充分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜 2 限GS男(%)	46.1	38.2	11.2	2.3	2.3
火曜 3 限GS男(%)	41.2	41.2	11.8	1.2	4.7
金曜 2 限GH男(%)	51.9	36.5	9.6	0.0	1.9
金曜 1 限GS女(%)	29.3	62.1	5.2	1.7	1.7
金曜 3 限GH女(%)	34.6	40.4	21.2	3.9	0.0
全クラスの平均値(%)	40.6	43.7	11.8	1.8	2.1
	84.3			3.9	

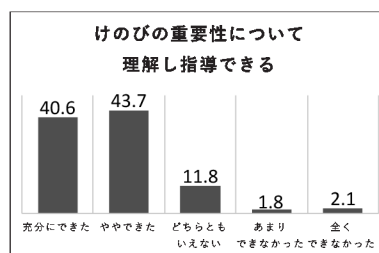
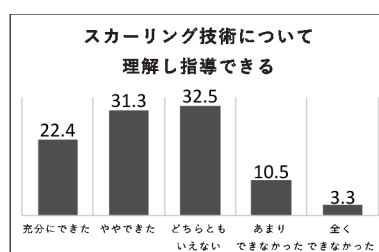


表 6

④ スカーリング動作の習得

	充分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜 2 限GS男(%)	19.1	23.6	39.3	14.6	3.4
火曜 3 限GS男(%)	25.9	36.5	23.5	8.2	5.9
金曜 2 限GH男(%)	25.0	38.5	28.9	5.8	1.9
金曜 1 限GS女(%)	17.2	31.0	37.9	10.3	3.5
金曜 3 限GH女(%)	25.0	26.9	32.7	13.5	1.9
全クラスの平均値(%)	22.4	31.3	32.5	10.5	3.3
	53.7			13.8	



3.2 クロールの技能について

クロールの技能（⑤⑥⑦）に対するアンケートの回答結果を表 7～表 9 に示した。クロールの技能に関しては、「全くできなかった」「あまりできなかった」の回答率が、キック動作（5.4%）プル動作（8.2%）スイム動作（11.3%）で、実際にクロールの評価基準を達成した学生の割合も 97.8%と非常に高かった。クロールは、幼少期（小学校 5・6 学年）の水泳の授業において続けて長く泳ぐことを目的として身につけるべき技能であるが、水泳Ⅰでは、さらにより速く泳ぐための専門的な技能を理解することを目的としており、ほとんどの学生が成績の評価基準（ノルマ）を達成できた。

表 7

⑤ クロールのキック動作の習得

表7 ⑤クロールのキック動作の習得					
	充分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜 2 限GS男(%)	38.2	41.6	15.7	2.3	2.3
火曜 3 限GS男(%)	35.3	42.4	16.5	2.4	3.5
金曜 2 限GH男(%)	36.5	48.1	7.7	7.7	0.0
金曜 1 限GS女(%)	32.8	50.0	12.1	3.5	1.7
金曜 3 限GH女(%)	26.9	50.0	19.2	3.9	0.0
全クラスの平均値(%)	33.9	46.4	14.2	3.9	1.5
	80.3			5.4	

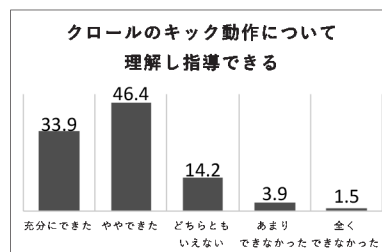


表 8

⑥ クロールのプル動作の習得

	十分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜 2 限GS男(%)	36.0	43.8	13.5	4.5	2.3
火曜 3 限GS男(%)	37.7	45.9	8.2	4.7	3.5
金曜 2 限GH男(%)	38.5	42.3	11.5	5.8	1.9
金曜 1 限GS女(%)	31.0	36.2	25.9	5.2	1.7
金曜 3 限GH女(%)	21.2	30.8	36.5	11.5	0.0
全クラスの平均値(%)	32.9	39.8	19.1	6.3	1.9
	72.6			8.2	

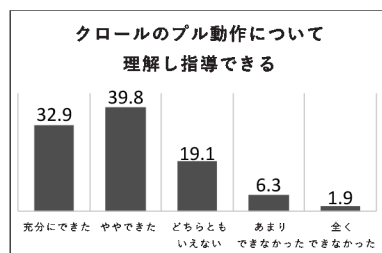
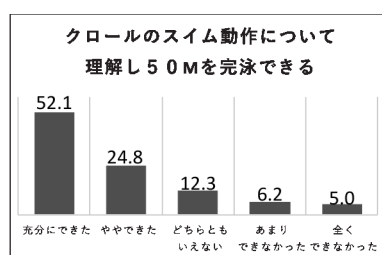


表 9

⑦ クロールのスイム動作の習得

	十分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜 2 限GS男(%)	59.6	28.1	6.7	2.3	3.4
火曜 3 限GS男(%)	58.5	29.4	7.1	2.4	4.7
金曜 2 限GH男(%)	46.2	21.2	13.5	11.5	7.7
金曜 1 限GS女(%)	50.0	24.1	20.7	3.5	1.7
金曜 3 限GH女(%)	46.2	21.2	13.5	11.5	7.7
全クラスの平均値(%)	52.1	24.8	12.3	6.2	5.0
	76.9			11.3	



3.3 平泳ぎの技能について

平泳ぎの技能（⑧⑨⑩）に対するアンケートの回答結果を表 10～表 12 に示した。平泳ぎの技能に関しては、「全くできなかった」「あまりできなかった」の回答率が、キック動作（6.3%）プル動作（6.1%）スイム動作（10.8%）で、実際に平泳ぎの評価基準を達成した学生の割合は 93.1%であった。平泳ぎもクロールと同じく、幼少期（小学校 5・6 学年）の水泳の授業において続けて長く泳ぐことを目的として身につけるべき技能であるが、実際には“あおり足”の学生が非常に多く、幼少期の技術習得が出来ていないことがわかった。今後も、平泳ぎの基本となるキック動作を十分に理解させ、技術指導力も同時に身につけさせることが課題である。

表 10

⑧ 平泳ぎのキック動作の習得

	十分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜 2 限GS男(%)	47.2	38.2	9.0	3.4	2.3
火曜 3 限GS男(%)	45.8	38.8	8.2	3.5	3.5
金曜 2 限GH男(%)	51.9	38.5	5.8	1.9	1.9
金曜 1 限GS女(%)	37.9	3.7	17.2	3.5	1.7
金曜 3 限GH女(%)	42.3	44.2	3.9	9.6	0.0
全クラスの平均値(%)	45.0	32.7	8.8	4.4	1.9
	77.7			6.3	

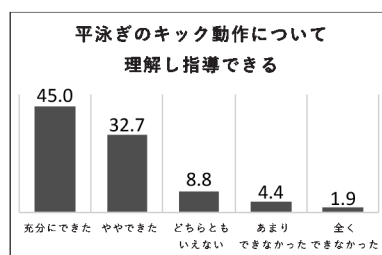


表 11

⑨ 平泳ぎのプル動作の習得

	充分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜2限GS男(%)	40.5	39.3	12.4	5.6	2.3
火曜3限GS男(%)	43.5	38.8	11.8	2.4	3.5
金曜2限GH男(%)	51.9	34.6	11.5	0.0	1.9
金曜1限GS女(%)	29.3	36.2	29.3	1.7	3.5
金曜3限GH女(%)	28.9	42.3	19.2	9.6	0.0
全クラスの平均値(%)	38.8	38.3	16.8	3.9	2.2
	77.1			6.1	

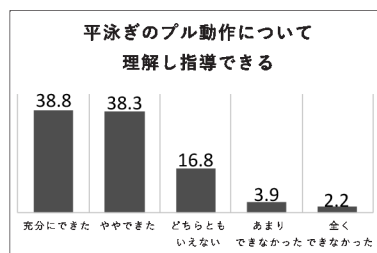
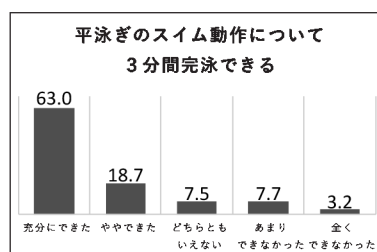


表 12

⑩ 平泳ぎのスィム動作の習得

	充分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜2限GS男(%)	67.4	14.6	5.6	5.6	6.7
火曜3限GS男(%)	55.3	27.1	5.9	8.2	3.5
金曜2限GH男(%)	65.4	19.2	7.7	5.8	1.9
金曜1限GS女(%)	65.5	19.0	8.6	5.2	1.7
金曜3限GH女(%)	61.5	13.5	9.6	13.5	1.9
全クラスの平均値(%)	63.0	18.7	7.5	7.7	3.2
	81.7			10.8	



3.4 応用技能について

応用技能(⑪⑫)に対するアンケートの回答結果を表13と表14に示した。応用技能については、「全くできなかった」「あまりできなかった」の回答率が、水中エクササイズ的重要性(18.3%)、競泳4種目について(13.2%)であった。そして「充分にできた」「ややできた」の回答率は、水中エクササイズ的重要性(59.6%)と、競泳4種目について(53.8%)ともに低かった。これらの到達目標に関しては、「理解して説明できる」と思っている学生の主観的な自己評価が極めて低く、スクーリング技術と同じく「どちらともいえない」の回答率が30%以上であった。これらの内容も、主に水泳IIで取り扱っている技能であるが、水泳により興味を示してもらうためにも指導内容を改めて見直すべき項目である。

表 13

⑪ 水中エクササイズの習得

	充分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜2限GS男(%)	28.1	31.5	32.6	2.3	5.6
火曜3限GS男(%)	31.8	37.7	16.5	8.2	5.9
金曜2限GH男(%)	23.1	40.4	28.9	7.7	0.0
金曜1限GS女(%)	15.5	36.2	37.9	6.9	3.5
金曜3限GH女(%)	21.2	32.7	34.6	45.8	5.8
全クラスの平均値(%)	23.9	35.7	30.1	14.2	4.1
	59.6			18.3	

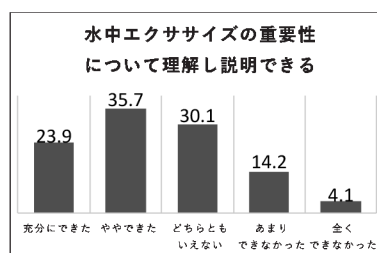
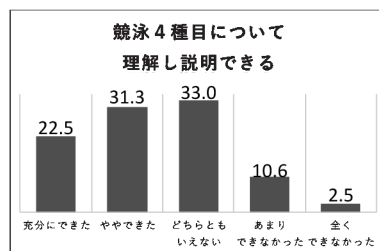


表 14

⑫ 競泳 4 種目の習得

	充分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜 2 限GS男(%)	19.1	37.1	38.2	3.4	2.3
火曜 3 限GS男(%)	28.2	34.1	23.5	9.4	4.7
金曜 2 限GH男(%)	28.9	34.6	26.9	5.8	3.9
金曜 1 限GS女(%)	19.0	27.6	36.2	17.2	0.0
金曜 3 限GH女(%)	17.3	23.1	40.4	17.3	1.9
全クラスの平均値(%)	22.5	31.3	33.0	10.6	2.5
	53.8			13.2	



3.5 この授業に対する積極性と理解度について

この 2 つの設問 (⑬⑭) は、本学の全ての授業に対して実施している回答項目で、その結果を表 15 と表 16 に示した。水泳 I では「この授業を主体的かつ積極的に取り組む事が出来なかった」と回答した学生はわずか 3.5%、また「この授業の内容が理解できなかった」と回答した学生もわずか 2.9%であった。つまり 85%以上の学生が、主体的かつ積極的にこの授業に取り組む、さらに授業の内容が十分に理解できていると主観的に自己評価していることがわかった。これは水泳 I の授業を評価・改善するための貴重な回答である。

表 15

⑬ この授業に対してどの程度主体的・積極的に取り組むことができたか？

	充分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜 2 限GS男(%)	41.6	41.6	12.4	2.3	2.3
火曜 3 限GS男(%)	41.2	38.8	12.9	3.5	3.5
金曜 2 限GH男(%)	50.0	34.6	9.6	3.9	1.9
金曜 1 限GS女(%)	50.0	41.4	8.6	0.0	0.0
金曜 3 限GH女(%)	50.0	42.3	7.7	0.0	0.0
全クラスの平均値(%)	46.6	39.7	10.2	1.9	1.5
	86.3			3.5	

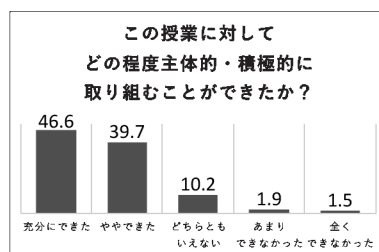
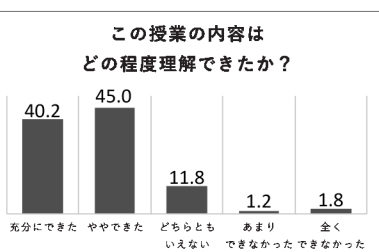


表 16

⑭ この授業に対してどの程度主体的・積極的に取り組むことができたか？

	充分にできた	ややできた	どちらとも いえない	あまり できなかった	全く できなかった
火曜 2 限GS男(%)	38.2	43.8	12.4	2.3	3.4
火曜 3 限GS男(%)	44.7	35.3	16.5	0.0	3.5
金曜 2 限GH男(%)	40.4	46.2	11.5	0.0	1.9
金曜 1 限GS女(%)	41.4	53.5	3.5	1.7	0.0
金曜 3 限GH女(%)	36.5	46.2	15.4	1.9	0.0
全クラスの平均値(%)	40.2	45.0	11.8	1.2	1.8
	85.2			2.9	



3.6 各到達目標における到達度と成績の関係について

FU ポータルには「FURIKA」の授業アンケートで得られた回答結果から、到達目標に対する学生の到達状況が把握できるように、様々なデータとの関係を示す散布図(到達図:T図)が掲載されている。成績と到達度を示すT図は、教員による客観的な成績評価(横軸)と、到達度に関する学生の主観的な自己評価(縦軸)の関係性を示している。

表17は「FURIKA」に掲載されている結果、「各到達目標に対する学生の主観的自己評価」と「教員の客観的成績評価」の相関係数を示した。「成績と総合到達度」は、当該授業科目の12項目全ての到達目標に対して、学生が回答した到達度(自己評価)の平均値で、全クラスの相関係数は0.42であった。また、到達目標の全項目において0.32～0.60の高い値を示し、14項目の中で最も高い相関係数を示したのは、平泳ぎの技能「⑩平泳ぎのスイム動作について理解し3分間完泳できる(0.60)」次いでクロールの技能「⑦クロールのスイム動作について理解し50mを完泳できる(0.56)」であった。この2項目は単位取得のための評価基準(ノルマ)であるため、当然のことながら学生の主観的な自己評価と成績評価が合致するであろう。また全体を通して、全ての項目において男子よりも女子の相関係数が低い傾向にあった。今後は、各項目に対する回答結果を「男女別」または「学科別」に、縦断的調査を実施することで新たな知見が得られるものと考えられる。

表17

⑬ 各達成目標における到達度と成績の関係

	成績と総合到達度	基本技能				クロールの技能		
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
火曜2限GS男	0.49	0.39	0.45	0.56	0.41	0.58	0.58	0.65
火曜3限GS男	0.59	0.52	0.58	0.57	0.54	0.61	0.65	0.47
金曜2限GH男	0.42	0.33	0.51	0.53	0.29	0.45	0.49	0.56
金曜1限GS女	0.28	0.09	0.14	0.18	0.13	0.31	0.25	0.50
金曜3限GH女	0.30	0.25	0.29	0.34	0.22	0.15	0.26	0.60
全クラスの平均値	0.42	0.32	0.39	0.44	0.32	0.42	0.45	0.56
	成績と総合到達度	平泳ぎの技能			応用技能		積極性	理解度
		⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭
火曜2限GS男	0.49	0.67	0.55	0.68	0.31	0.48	0.52	0.57
火曜3限GS男	0.59	0.71	0.71	0.61	0.60	0.60	0.60	0.66
金曜2限GH男	0.42	0.41	0.48	0.67	0.35	0.44	0.45	0.53
金曜1限GS女	0.28	0.33	0.30	0.59	0.33	0.38	0.25	0.25
金曜3限GH女	0.30	0.34	0.23	0.46	0.25	0.29	0.32	0.14
全クラスの平均値	0.42	0.49	0.45	0.60	0.37	0.44	0.43	0.43

①ボビング動作を理解し指導できる	⑧平泳ぎのキック動作について理解し指導できる
②浮遊技術および潜水技術を理解し指導できる	⑨平泳ぎのプル動作について理解し指導できる
③けのびの重要性について理解し指導できる	⑩平泳ぎのスィム動作について理解し3分間完泳できる
④スカーリング技術について理解し指導できる	⑪水中エクササイズの重要性について理解し説明できる
⑤クロールのキック動作について理解し指導できる	⑫競泳4種目について理解し説明できる
⑥クロールのプル動作について理解し指導できる	⑬この授業に対してどの程度、主体的・積極的に取り組めたか？
⑦クロールのスィム動作について理解し50mを完泳できる	⑭この授業の内容はどの程度理解できたか？

3.7 学習時間について

「FURIKA」の授業アンケート調査で、設問⑬⑭と同じく、全ての授業に対して実施している回答項目の「この授業について1回の授業に対してどれくらい学習（予習復習、資料の収集・閲覧を含む）しましたか？」について表18に示した。回答結果は0分～30分未満(88.4%)が大部分を占めており、30分～60分未満は5.4%、60分～120分未満は5.4%、180分以上は0%の回答率であった。

この学習時間について、水泳は自宅学習が日常で安易に行えない実技科目であるため、このような結果を招いているものと示唆される。しかしながら、評価基準に対する学生の達成率は、クロール50m泳テストで97.8%、平泳ぎ3分間泳テストで93.1%という結果が示され、評価基準（ノルマ）に対して非常に高い達成率である。このことから、学生の本授業に対する毎回の取り組み方、本授業のプログラムの有効性、成績評価基準および評価方法の妥当性が窺える。また、このような状況の中でも10.8%の学生は、1回の授業に対して30分以上の学習時間を回答しており、この学生に関しては、到達目標を達成するための意欲、向上心、自主性が十分に感じられる。今後さらに授業に対して積極的かつ意欲的に取り組む学生の姿勢を育むためにも、学習時間の向上を促進できるような授業改善に取り組みたい。

表18

⑭ 1回の授業に対する学習時間（予習復習・資料の収集・閲覧を含む）

	学習時間			
	0～30分未満	30～60分未満	60～120分未満	180分以上
火曜2限GS男（人）	83	2	4	0
火曜3限GS男（人）	72	3	8	0
金曜2限GH男（人）	47	3	2	0
金曜1限GS女（人）	55	2	0	0
金曜3限GH女（人）	40	8	4	0
計（人）	297	18	18	0
割合	88.4%	5.4%	5.4%	0.0%

4. おわりに

冒頭でも述べたように、学生が興味・関心を持って選択履修する科目については、当然のことながら学生は前向きに、場合によっては“資格を取得する”という高い意識で授業に取り組むと考えられる。したがって、アンケート結果に関しても、当然ながら学生の前向きな回答やコメントが寄せられる。しかし、学生が興味・関心を持たず、苦手意識を持って受講した必修科目で得られる授業後のアンケートの回答は、受講した学生の率直な意見が寄せられるため、水泳Ⅰのような科目こそ FURIKA の結果を有効に活用すべきである。

水泳Ⅰは、残念ながら興味・関心を持たずに開講されている「苦手意識が高い必修科目」として捉えている学生が多い傾向にあるが、初年度の授業開講後の「FURIKA」Web 授業アンケート調査では、思った以上に本授業を積極的かつ前向きに受講し、授業開講時よりも飛躍的に技術が向上したという意見が多く寄せられていた。このアンケート結果を真摯に受け止め、今後も前向きに授業を改善していけるよう努めたい。また、各到達目標に対する学生の主観的な自己評価については、実際の授業への取り組みと、学生自身の自己評価に若干のズレが生じているように感じられる。つまり、実際の取り組みに対して、学生の自己評価が予想以上に高いクラスと低いクラスが存在しているように見受けられた。これは、授業クラスが学科別、男女別に分けられている事が影響しているものと考えられ、実際のアンケート結果も授業クラス別に回答分布のバラツキが見られた。これらの学生のメタ認知に関しても、クラス別、学科別に検討する必要性を感じる。

次年度は、学習時間の向上を促進できるような授業改善の取り組みと併用し、各項目に対する学生の自己評価との関係性も検討課題としたい。さらに、到達目標（ノルマ）については、ある程度の基準を明確に設けることで、その到達目標を達成するための意欲・興味・関心が高まることが示唆された。したがって、授業の到達目標（ノルマ）は、ある程度の努力が必要な基準を設定することで、その科目に対する予習・復習の意欲も高まり、授業に対して真摯に取り組む姿勢が育まれるものと考えられる。

5. 参考文献

- 1) 天野秀哉, 鋤柄純忠, 大山康彦 (2009) 水泳実習における泳力向上と授業認識に関する一考察. -小学校教職課程大学生を対象として-. 茨城キリスト教大学紀要第 43 号 203. 自然科学, 203-216.
- 2) 日高敬児 (2008) 「泳げる」ということについて. 佐賀大学文化教育学部研究論文集. 第 12 集, 第 2 号, 241-247.
- 3) 清野哲也, 坂田洋満, 篠村朋樹 (2008) 水泳授業における授業改善について. 木更津工業高等専門学校紀要. 第 41 号, 45-49.

- 4) 松原匠, 長見真 (2014) 戦後学校体育における水泳授業に関する研究～生涯スポーツを志向する水泳授業を支点として～. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集. Vol. 15, 101-108.
- 5) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説: 体育編
- 6) 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説: 保健体育編
- 7) 文部科学省 (2008) 高等学校学習指導要領解説: 保健体育編
- 8) 野村東子, 春日晃章, 熊谷佳代, 宇野嘉朗, 小椋優作 (2014) 小学校教員の泳力別にみた水泳指導に対する困難度. 岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学) 第 38 巻, 127-131.
- 9) 櫻井美子 (2013) 中学校武道必修化の実態とこれからの授業展望への可能性-海老名市水泳授業に着目して-. 神奈川大学国際経営論集 45, 121-131.
- 10) 田場昭一郎, 平野雅巳, 松波勝, 佐藤功一, 山口祐一郎 (2017) 大学生の水泳教育に関する実態調査 -福岡大学スポーツ科学部の学生の水泳について-. 福岡大学スポーツ科学研究 47 (2): 11-22.

6. 参考資料

小学校学習指導要領 (水中での運動に関する内容) 「生きる力」第 2 章 第 9 節 体育の項目「D」

第 1 学年および第 2 学年 (水遊び)

次の運動を楽しく行い、その動きができるようにする。

ア 水に慣れる遊びでは、水につかたり移動したりすること。

イ 浮く・もぐる遊びでは、水に浮いたりもぐったり、水中で息を吐いたりすること。

運動に進んで取り組み、仲よく運動をしたり、水遊びの心得を守って安全に気をつけたりすることができるようにする。

水中での簡単な遊び方を工夫できるようにする。

第 3 学年および第 4 学年 (浮く・泳ぐ運動)

次の運動を楽しく行い、その動きができるようにする。

ア 浮く運動ではいろいろな浮き方やけ伸びをすること。

イ 泳ぐ運動では、補助具を使つてのキックやストローク、呼吸をしながらの初歩的な泳ぎをすること。

運動に進んで取り組み、仲よく運動をしたり、浮く・泳ぐ運動の心得を守って安全に気をつけたりすることができるようになる。

自己の能力に適した課題をもち、動きを身につけるための活動を工夫できるようにする。

第 5 学年および第 6 学年 (水泳)

次の運動の楽しさや喜びに触れ、その技能を身に付けることができるようにする。

ア クロールでは、続けて長く泳ぐこと。

イ 平泳ぎでは、続けて長く泳ぐこと。

運動に進んで取り組み、助け合つて水泳をしたり、水泳の心得を守って安全に気を配ったりすることができるようにする。

自己の能力に適した課題の解決の仕方や記録への挑戦の仕方を工夫できるようにする。